

2・26緊急出版、ブックレット重力NO. 1

# 「LEFTALONE 構想と批判」

鎌田哲哉 編／「重力」編集会議 刊

◎「重力」編集会議より、ブックレット重力

NO. 1「LEFTALONE 構想と批判」をお届けする。ここには、明石書店が書籍版「レフト・アローン」のための執筆を私に依頼しながら、他の書き手、特に柄谷行人の意向に遠慮して掲載を却下した、私の追記原稿「途中退場者の感想——LEFTALONE 批判」がある。

(仮表紙の画像は変更のため削除しました)

◎さらに、書店のこの判断を受けて私が逆に掲載を拒否した、映画「LEFT ALONE」における絃と私の対談パート「小ブル急進主義は原理たりうるか」がある。いずれも痛快な、読み応えがある「作品」であることは保証する。これまで私が書いた井土紀州論や絃

秀実論も収録したが、それ以上に監督の井土と、元Q-project 副代表(winds-Q 開発者)の穂積一平から拙稿への感想をもらったのは望外の喜びだった。

◎一連の経緯については、序文を読んでほしい。今言えるのは、問題が特定の書き手、たとえば柄谷の私怨や自己絶対化だけにあるのではないことだ。今回の場合、それと同程度に編集サイドの弱腰や判断ミスがトラブルの原因になっていた。事実反した誹謗中傷があれば別だが、私の文章にそれはない。明石書店は、柄谷の異論を併載して問題解決を図ることもできたはずだ。「重力」編集会議は、小さな権力を行使したがる醜怪な物書きと同時に、自主検閲や自主規制を促す暗黙の雰囲気＝空気をも標的とするだろう。

◎ブックレット「LEFTALONE 構想と批判」は、我々が「空気」の同質性を破壊し、多事争論の気風を再創設する第一歩である。それは同時に、来るべき「重力03」へのプロローグでもある。

鎌田哲哉 (かまだ・てつや) 批評家。1963年北海道生れ、東大法学部卒。主要論文に、「丸山真男論」「知里真志保の闘争」「有島武郎のグリンプス」「進行中の批評」他。本ブックレット以外の「LEFT ALONE」関係の論文に、「西部忠への返信」(『重力02』03年3月)、「京都オンライン会議事録・西部柄谷論争の公開」(<http://www.q-project.org/>、03年11月)がある。現在、「重力03」(Q-NAM 問題特集)を西部忠、松本圭二と準備中。

(WEB 重力→ <http://www.juryoku.org/> お問い合わせ→ [juryoku@juryoku.org](mailto:juryoku@juryoku.org))

## 「内容目次」

編者序文／途中退場者の感想——LEFTALONE 批判(鎌田哲哉)／末吉(井土紀州)／途中退場者の感想「E」を読んで(穂積一平)／対談——小ブル急進主義は原理たりうるか(絃秀実・鎌田哲哉)／井土紀州の映画について「絃秀実」は探している「定説の破壊——絃秀実『帝国の文学』書評」(以上鎌田哲哉)／後記  
予価 五百円(税込)

「LEFTALONE」には、取り返しつかない「現在」の致命的な排除がある。この映画は、その製作過程と全く同時期に生じた出来事をあらゆる個所で隠蔽しており、しかも隠蔽自体がなかったかのように映像全てを進行させてしまっている。言うまでもなく、この出来事とは「資本と国家への対抗運動」を自称したNAM (New Associationist Movement) の問題である。(略)「LEFTALONE」が新左翼の誕生と転形の総決算を目標とする限り、この同時性を回避してなかったことにするのは単なる自己欺瞞でしかない。NAMもまた、主観的には日本の左翼運動の理論的実践的な総括と揚棄を課題にしていたからである。より正確に書けば、「LEFTALONE」とNAMの密接な関連性＝同時性を語りだしたのは、他ならぬ主人公の絃秀実自身なのである。(以下略)

殺すな、と陳腐な説教をしているのではない。殺すなら、せめて大人からだ。殺すのが困難で労力も時間も必要なモップと、モップを利用し他人の歯や眼を平然と傷つけながら、自分が批判されると都合よく寛容を主張する、そういうゴロツキどもから最初に殺す。少なくとも、私はそうする。これらのことを、私は井土の映画を手がかりにもう一度考えたいと思っている。

「本文より」